

【基調講演】

国有林経営における魚梁瀬林業の位置づけ

赤池 慎吾

皆さんこんにちは。高知大学地域連携推進センターの赤池慎吾と申します。本日、このような素敵な会場をご準備いただきました安田町の皆さん、本当にありがとうございます。また、このように多くの方の前で報告する機会をいただきました高知人文社会科学会の皆さん、本当にありがとうございます。

今日は「国有林経営における魚梁瀬林業の位置づけ」についてお話をさせていただきます。脇野博先生は、私の博士論文の副査をお願いした先生です。脇野博先生と一緒に皆様の前で報告させていただくことを非常にうれしく思っております。

1. はじめに

早速発表に入らせていただきます。写真1左は、魚梁瀬で導入されたライマ社（米国）製シェイ式蒸気機関車の白黒写真です。鉄道がお好きな方は分かるかと思いますが、幅762ミリゲージ（左右の軌条の間隔）にこれだけ大きな機関車を載せて、さらに大量の木材を運搬していました。

シェイ式蒸気機関車は、台湾の阿里山森林開発の現場で1968年まで活躍しておりました。写真1右は40分の1の模型です。神奈川県横浜市にある原鉄道模型博物館に展示さ



写真1 シェイ式蒸気機関車

出典：左は四国森林管理局ホームページよりダウンロード（2016年3月1日取得）、
右は原鉄道模型博物館にて著者撮影

れております。

白黒写真のためわかりませんが、魚梁瀬に導入されたシェイ式蒸気機関車は、もしかしたら金色や赤いラインが入っていたのかもしれない。

さて、魚梁瀬地域は四国で数少ないスギ天然生林が分布し、魚梁瀬スギをはじめとする優良な天然林を誇る、わが国を代表する林地です。明治以降、国家による森林資源の管理・経営を目的とした国有林体制が確立されていきました。その過程で、先ほど脇野博先生のご報告にありましたとおり、近世において蓄積された膨大な森林資源は、明治国家の資金源として極めて重要な位置を占めていたと考えられます。

魚梁瀬森林鉄道は、1907（明治40）年に安田川山線に最初に軌道が開設されました。1919（大正8）年に、先ほど紹介しましたシェイ式蒸気機関車が導入され、動力運材が本格化しました。1942（昭和17）年には、支線を含めた総延長は約250kmに達し、国内屈指の森林鉄道網が完成しました。

今日は、魚梁瀬林業が国有林経営の中でどのような位置づけにあったのかということ、掘り下げていきたいと思います。

本日は、大きく3つのことをお話しします。

一つ目は、魚梁瀬林業を産業史的な視点から把握しようというものです。先行研究を調べると、魚梁瀬地域の森林・林業を近世から現在の時間軸で扱った研究は多くありません。そこで、まずは、いつ、どのような樹木が、どのくらい伐採されたのかということ、しっかりと把握します。

地域住民に「魚梁瀬林業はどのような特徴がありますか」と訪ねると、「森林鉄道が走っていた」や、「大きな魚梁瀬スギを伐採していた」という答えが返ってきます。また、「魚梁瀬営林署の署長さんは出世したよ」という話を耳にします。しかし、どのくらいの伐採量があったのかという話は聞かれません。本報告では、馬路営林署・魚梁瀬営林署・奈半利営林署管内の木材伐採量の推移をしっかりと確認します。その上で、四国四県の国有林を所管する高知営林局（現四国森林管理局）における魚梁瀬林業の位置づけを整理します。

二つ目は、先ほど脇野博先生のお話にありましたが、森林政策史と林業技術史という視点から魚梁瀬林業を考えます。森林政策史を考える上で大事なことは、「森林資源をどうやって伐採・運搬したか」ということに加えて、「どうやって保護・造林してきたのか」という利用と保護の二つの視点から政策史を読み解くことです。この二つの視点で

魚梁瀬林業を考えてみます。

最後に、三つ目として、住民の「語り」をヒントにして、魚梁瀬林業を私なりに再考してみます。実際にヒアリングをさせていただいて、新たな研究の視点がえてきたので、ご紹介させていただきたいと思います。

2. 魚梁瀬林業の実態と特徴

今回、魚梁瀬林業を分析するにあたり、『高知大林区署統計書』と『高知営林局統計書』、『高知営林局事業統計書』を用いました。また、国有林の歴史については、『高知営林局史』を参考にしました。

『高知大林区署統計書』は、1912（大正元）年に発行されています。統計書を探したところ、県内の図書館には所蔵されていないことがわかりました。『高知大林区署統計書』が閲覧可能な図書館は、東京大学、京都大学、九州大学に一部残っているだけです。もちろん四国森林管理局に所蔵されているとは思いますが、この統計書にアクセスするだけでも非常に大変だというのが今回の調査でわかりました。本報告で使用した資料は、すべて複写をしております。本研究プロジェクトの成果のひとつとして、地域住民や郷土史研究者が統計書にいつでもアクセスできるような環境を作っていくことも考えています。今回使用した統計資料は、東京大学経済学部図書館でコピーしたものです。今回はこれを使って、魚梁瀬林業の変遷をみていきます。

本報告では、馬路営林署・魚梁瀬営林署・奈半利営林署管内を便宜的に魚梁瀬林業及び魚梁瀬地域と定義しました。対象とする時期は、森林鉄道の活躍した大正から昭和40年頃までとし、少し時期を絞って報告します。

学生の中には、今、自分が地図上のどこにいるのか分からないという人がいるかもしれません。中芸5町村が魚梁瀬地域で、本会場の安田町は中心に位置しています。

高知営林局は、四国四県の国有林を所管しています。徳島県にはほとんど国有林がありません。これには明治初期の歴史的経緯によるものです。香川県にもほとんどなく、愛媛県南部に少しあります。「高知営林局」という名前が付いており、四国の国有林は高知県に偏在しています。そして、特にこの魚梁瀬地域に国有林が多く存在しています。

脇野博先生の報告にあった青森県、秋田県は、明治に入って、国有林が8割とか9割を占めていた地域です。高知県の国有林野率は四国3県と比べて高いですが、東北地方と比べるとそれほど高くない地域と言えます。

写真2は修羅と木馬出しの様子です。大正期の魚梁瀬地域で撮影された写真です。これだけ膨大な木材が大正期に山から伐り出されて、木馬と流送（管流し、筏流し）で田野まで運搬されていました。人の大きさと木材の大きさを比べると、木材が非常に太いことが分かると思います。

少し重複しますが、この通時的分析で用いたデータは『高知大林区署統計書』の1914（大正3）年から1923（大正12）年までと、『高知営林局統計書』の1924（大正13）年から1998（平成10）年までです。営林署の統廃合がなされていますが、本報告では魚梁瀬地域全体を把握することを目的としていますので、馬路営林署・魚梁瀬営林署・奈半利営林署で表記しています。伐採量については立方メートル（ m^3 ）に統一して整理いたしました。また、統計書には、樹種や伐採方法など様々な統計が記載されています。例えば、木が立ったまま、



写真2 修羅と木馬出し
（大正期の魚梁瀬）

出典：四国森林管理局ホームページ
よりダウンロード（2016年3
月1日取得）

立木のままで民間に販売する場合と、いわゆる直営と言って、国有林が自分たちで木材伐採を行い、木材を搬出する方法があります。魚梁瀬林業では、ほとんどが直営で行われていたことも特徴の一つです。また、統計的には主伐・間伐で分かれています。これは今でも使う言葉ですが、間伐材もこれに含んでいます。そのほか、木材の利用法、用途で区分されています。柱など建築用材に使う用材か、または薪や炭焼きに使う薪炭材など用途によっても統計が出ています。今回は伐採量全体を把握するというを目的にしていますので、これら立木売りであったり、直営生産であったり、主伐・間伐、用材・薪炭材というのを全て、重複はしないように整理・把握しました。

図1が高知営林局における伐採量の推移です。1914（大正3）年から伐採量が伸びていって、昭和に入って非常に大きくなり、1930（昭和5）年には60万 m^3 を超える木材が出ています。特に大正初期に20万 m^3 ぐらい伐採しているということに驚きました。

1935（昭和10）、1939（昭和14）～1945（昭和20）のデータが0（ゼロ）になっているのは木材生産が行われなかったわけではなくて、統計書が手に入らない又は刊行されていなかったためです。

注目したいのは1926（昭和元）年頃に木材伐採量が急増している点です。これだけ急

激に伐採量を増やすことができた技術的社会的背景と森林鉄道との関係について今後は調べていきたいと考えています。

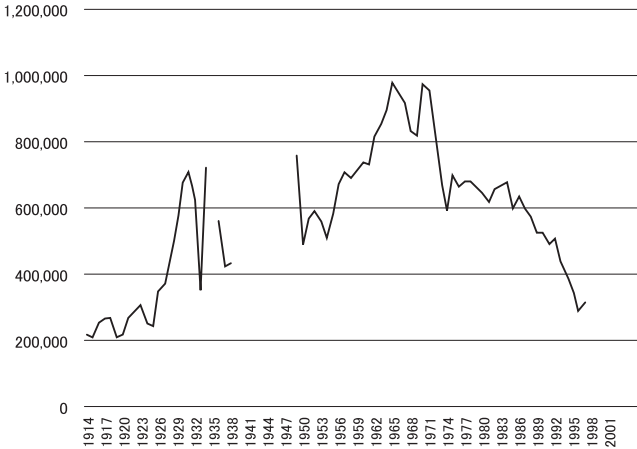


図1 高知営林局における伐採量の推移 (1914～2011)

出典：『高知大林区署統計書』及び『高知営林局統計書』の各年度版

ここから魚梁瀬地域について見ていきます。写真3は、昭和12年頃の魚梁瀬地域で、人力による積込作業をしています。大正、昭和という時期に、こういうことが山の中で行われていたということを想像していただければと思います。

図2は、馬路営林署、魚梁瀬営林署、奈半利営林署における伐採量の推移です。下から馬路営林署、魚梁瀬営林署、奈半利営林署の順です。1978（昭和53）年以降は馬路営林署と魚梁瀬営林署のデータが統合されていますので、全体量を見ていただければと思います。

3営林署の伐採量を比べると、魚梁瀬営林署が多いというのが分かります。奈半利営林署には北川村事業所も入っていますので、比較的多くて、馬路営林署は年間2万～3万m³ぐらい伐採量があります。特に時代によって伐採量の増減が激しいのは、魚梁瀬営林署です。奈半利営林署の伐採量も小さくなく、馬路営林署と同じぐらいの伐採量があったことが分かりました。

魚梁瀬地域の伐採量と販売価格が高知営林局のどのぐらいの位置を占めていたのかということと比較してみました。図3は、高知営林局全体に占める魚梁瀬地域の伐採量と販売価格の推移です。高知営林局は土地の売り払いや、他にもいろいろな事業をやっていますので、この価格は木材の販売価格の割合です。見ていただきますと、量よりも、販売価格に占める割合が大きく、特に大正から昭和の初期にかけて、高知営林局の50%を超えていたことが分かりました。もし皆さんが「魚梁瀬林業はどのような特徴がありますか」と聞かれたときは、「大正から昭和にかけて、高知営林局の半分ぐらいを稼いでいた」と言っていたのではないかと思います。



写真3 人力による積込作業
(1942年、魚梁瀬)

出典：四国森林管理局ホームページ
よりダウンロード (2016年3月1日取得)

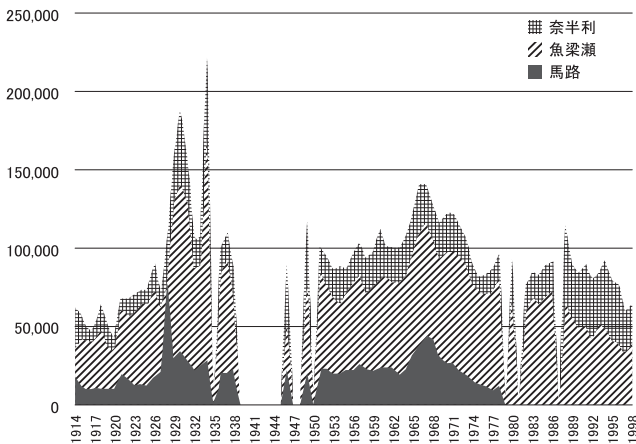


図2 馬路・魚梁瀬・奈半利の各営林署における伐採量の推移

出典：『高知大区署統計書』及び『高知営林局統計書』の各年度版

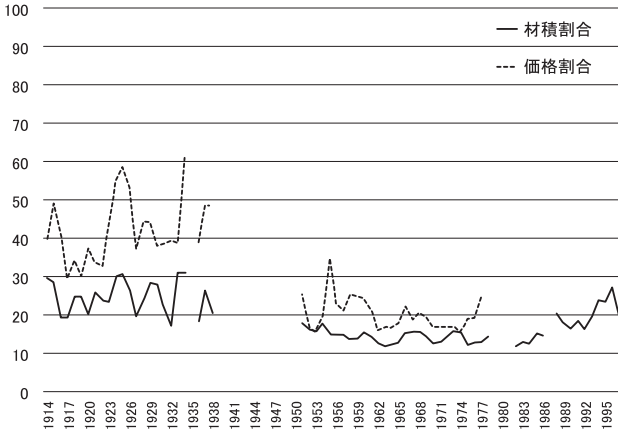


図3 高知営林局に占める馬路・魚梁瀬・奈半利の3営林署の伐採量及び価格割合
出典：『高知大林区署統計書』及び『高知営林局統計書』の各年度版

昭和中頃から、販売価格に占める割合は30%、20%とだんだん下がってきています。ここからは、国有林統計でも、非常に国有林の経営が厳しくなって、また自然保護の流れが出てきたために、価格のデータがなくなっています。材積割合を見ると、おおよそ2割から3割程度はこの魚梁瀬地域で伐採されており、高知営林局の中で非常に重要な位置を占めていたということが分かりました。

次は、どのような樹種が伐採されていたのかを見ていきたいと思います。

皆さん、魚梁瀬林業は魚梁瀬スギを伐採していたと考えているのではないのでしょうか。1914(大正3)年の馬路営林署における樹種別伐採割合をみてください(図4)。最も多く伐採されているのは榎(ツガ)です。ヒアリングをすると「榎は枝が張っていて伐りにくかった」という話を良く聞きます。大正初期は、ずいぶんと伐りにくい榎の生い茂った事業区を伐採していたようです。天然の魚梁瀬スギと、人工植林したものも含まれ

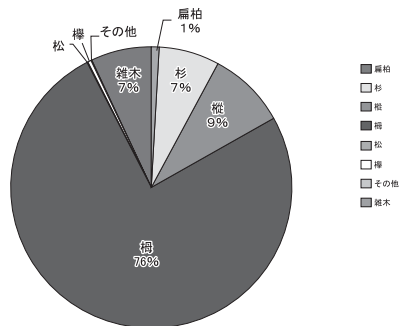


図4 馬路営林署における樹種別伐採割合(1914年)

出典：『高知大林区署統計書』1914(大正3)年度版

ると思いますが、大正初期の馬路管林署では、杉はだいたい10%未満でした。樅（モミ）は、9%を占めています。そのほか、雑木、広葉樹、薪用が大正初期に馬路管林署で伐採された樹種の特徴です。

これも調べてみて面白かったのですが、馬路管林署と魚梁瀬管林署の樹種別伐採割合はかなり違いました。魚梁瀬管林署は杉が多く、約3割を杉が占めています（図5）。もちろん樺や樅もあったりするし、扁柏（ヒノキ）も一部あります。魚梁瀬管林署の樹種別伐採割合に雑木がほとんど見られない。当時は、用材生産に特化した伐採が行われていたことが推察されます。

奈半利管林署の樹種別伐採割合を見ておきましょう（図6）。杉の割合が高く、大正初期スギの伐採割合は奈半利管林署管内北川村事業区が一番多い。このように、大正初期の樹種別伐採割合は、皆さんの想像と少し違っていたようです。

ここからは、1914（大正3）年と1925（大正14）年で樹種別伐採割合がどのように変化したかを見ていただきたいと思います。伐採する事業区が違えば、出てくる樹種も違ってきます。まず、馬路管林署に関しては、間伐用材が多くを占めています。これは施業方法が主伐から間伐に変わったことを意味すると考えられます。この変化は、先ほどの脇野博先生のお話だと、切る木がなくなったのか、もしかしたらたまたまこの年の事業区に間伐が多かったのかもしれません。この10年間で伐る木が少し変わってきたのか

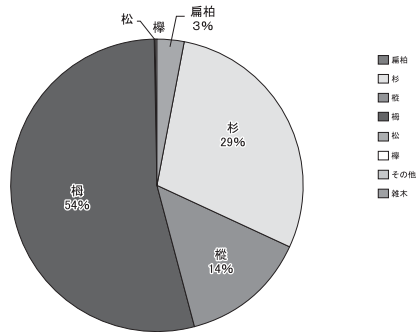


図5 魚梁瀬管林署における樹種別伐採割合 (1914年)

出典：『高知大林区署統計書』1914（大正3）年度版

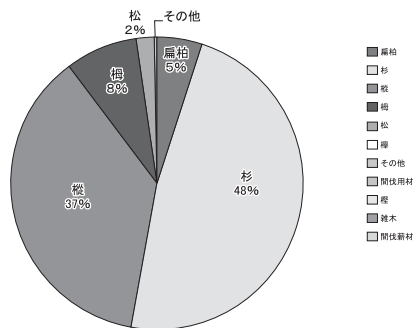


図6 奈半利管林署における樹種別伐採割合 (1914年)

出典：『高知大林区署統計書』1914（大正3）年度版

などと思います。

次に、魚梁瀬営林署を見てみましょう。やはり杉が卓越している状況です。1914（大正3）年には見られなかった雑木が入ってきているということが特徴かと思えます。

最後に、奈半利営林署です。奈半利営林署も杉が多いです。これも年度によってももちろん違いますので、少し長いスパンで見なければいけません、大正から昭和の初めにかけて伐採樹種がずいぶん変わってきたことが統計資料から明らかになりました。

小括をします。高知営林局全体の伐採量は、1920年代後半から急増して、1965年にピークを迎えた。その後、伐採量は激減している。3営林署の動向を見ると、高知営林局全体に占める魚梁瀬林業の伐採量は3割前後ということがわかりました。さらに、魚梁瀬林業の伐採量のピークは1937年（昭和12）年であることがわかりました。本報告の目的である高知営林局における魚梁瀬林業の位置づけというのは、伐採量ではだいたい30%前後、価格では40%前後を占めていたことがわかりました。樹種別割合を見ると、営林署ごとに特徴が見られ、杉よりも柾や樅の伐採量が多かったことがわかりました。

3. 保護と利用の魚梁瀬林業史

続きまして、森林政策史と林業技術史について説明いたします。

森林政策史は、利用の歴史だけではなくて、保護の歴史もしっかりと学ばなければいけないと考えています。この部分は脇野博先生のご報告と重複しますので、関係するところのみ報告致します。まず、1876（明治9）年に官民有区分が行われ、土地所有権が確定しました。そして、魚梁瀬地域の森林の多くは国有林の前身である「官林」「官有林野」となりました。1886（明治19）年、大小林区署管制が布かれ、「高知大林区署」ができました。その後、1893（明治26）年に四国四県を管轄する高知大林区署が誕生しています。

ここからは少し大きな話になりますが、1897（明治30）年に「森林法」が制定されました。特徴的なところを挙げますと、現在も続いている保安林制度の始まりがこの1897（明治30）年になります。私が保安林台帳等を調査する限りでは、1897（明治30）年当時、魚梁瀬地域で保安林に指定されたところはありませんでした。

1899（明治32）年、国有林野法が公布され、国有林野特別経営事業により国有林経営が本格的にスタートしました。1907（明治40）年に改正森林法が出されて、営林監督の強化、森林組合というのができてきます。

保護の視点から重要な政策として、1915（大正4）年に保護林の設定に関する通達と

いうのが出ています。それを受けて、1918（大正7）年に魚梁瀬の千本山が保護林に指定されました。魚梁瀬地域に森林鉄道が開通する以前に、保護林の指定がされていたということです。森林鉄道でたくさんの木材を伐採したということだけでなく、最も森林蓄積の多かった千本山周辺が保護林として保護されています。千本山保護林の保護の歴史と、森林鉄道をはじめとする森林開発の歴史の双方を学ぶことが、魚梁瀬林業を考える上で非常に重要なところではないかと思っております。

林業技術史についてです。蒸気機関車のお話をしましょう。1919（大正8）年に安田川山線に最初に導入されたのは、シェイ式蒸気機関車です。この機関車は歯車型の特殊構造で、車体右側の歯車がガタガタと動いて機関車が動きます。しかし、索引力が弱く、全長の長さの影響などで脱線も多いため、評判は悪かったようです。そのため、1925（大正14）年に廃車になりました。全国で最初に廃車になった森林鉄道機関車だと言われています。ただ、このシェイ式蒸気機関車というのは、大正の初期、まさに同じ時期に台湾の阿里山森林開発に導入されています。一部改良されていますので同じ機関車ではありませんが、シェイ式蒸気機関車が阿里山森林鉄道で1968（昭和43）年まで活躍していました。

1900（明治33）年、魚梁瀬地域ではじめて施業案が編成されています。全国の林業地とくらべて遅いです。先ほど脇野博先生のご報告にありました青森、秋田、木曾に比べて編成の時期に時間差があったということが、もしかしたら魚梁瀬林業が研究対象にあまりなっていないところではないかと個人的には考えております。

小話をします。1899（明治32）年、国有林野特別経営事業で官行斫伐がスタートしました。忘れてはいけないのは、1918（大正7）年に千本山が保護林に指定されたということです。その後、国有林の生産力増強計画や木材増産計画を背景として、魚梁瀬地域の伐採量は非常に増えてきたことが分かりました。その中で森林鉄道というのは、木材生産の激増を支えた革新的な運材技術の一つであったと考えられます。

森林鉄道が活躍し運材を支えた時代は、1919（大正8）年から1963（昭和38）年の44年間です。それ以降は、トラック運材に置き換わりました。1925（大正14）年前後の木材伐採量の急増は、集材機の導入と関係しているのではないかと考えています。集材技術と運材技術の関係も今後の課題にしたいと考えています。

4. 「語り」から魚梁瀬林業を再考する

最後に、ヒアリング調査から見えてきた魚梁瀬林業の特徴について報告します。

1935（昭和10）年生まれのYさんのお話です。柚夫が伐採する区域を決める「札振り」では、良い山と悪い山が平等になる工夫があったこと。昭和30年代後半、チェーンソーが導入されたことで、オイルの臭いや山がうるさくなくなったと感じたことなど、柚夫の山に対する愛着に変化がみられたのがこの時期のようです。また、チェーンソーの導入により、柚道具の取扱や技術習得の方法も大きく変わりました。柚のルールや営林署との関係、山への想いが昭和30年代後半に大きく変化したようです。

1930（昭和5）年生まれのKさんのお話です。長屋、柚小屋での生活についてお話を伺ったところ、「酒は高かったので、めったに飲まなかった」という話題で盛り上がりました。帳簿を見せていただくと、年に2回しか清酒を買っていないことがわかり、イメージしていた柚の暮らしとだいぶ違っていました。

1935（昭和10）年生まれのTさんのお話です。「柚はやはり給与が良かった。木馬曳が一番しんどかった」と伺いました。

ここからは、Tさんのお話にヒントを得て、当時の暮らしを考える上で重要な「お金」、つまり給与について掘り下げていきます。

当時の林業従事者の給与実態について統計書から分かる範囲でご紹介します。上から二番目が柚の給与で、1日あたり1円弱です（図7）。ヒアリングにあったように、木馬曳の給与が一番高い。また筏流も高いですね。牛馬荷車も高いですが、馬の餌代なども含まれているので高い賃金になっていると注釈がありましたので、これは除外してもいいのかなと思います。造林は、男女の給与差がかなりあること、運材は伐木と同じぐらい給与が高いこと、がわかります。魚梁瀬林業を支える人たちの技術の差というのが、給与差に反映されていたのではないかなと思います。

今後、農業で生計を立てていた方と柚をやられている方、山仕事をされている方ではどのぐらいの給与（稼ぎ）が違ったのか、生活水準が違ったのかということをしかりと調べて、比較していくことで、この時代の生活史を再考する大きなヒントになるのではないかと考えています。

国有林経営における魚梁瀬林業の位置づけ

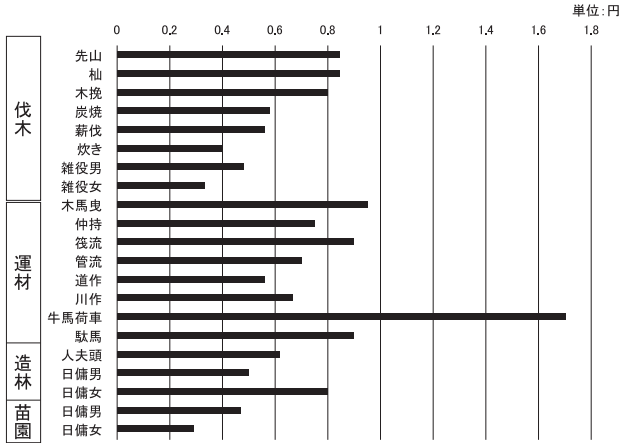


図7 林業従事者の職種別賃金 (1912年、一日あたり)

出典：『高知大林区署統計書』1912 (大正元) 年度版

もう一つ、暮らしに関してお話しします。林業従事者の支出に関する統計データです (図8)。袖、木挽、木馬曳、トロッコ曳は給与がもともと高いので、差額が多い。やはり木馬曳は給与が良かったということで、手持ちの金があったのかなと思います。

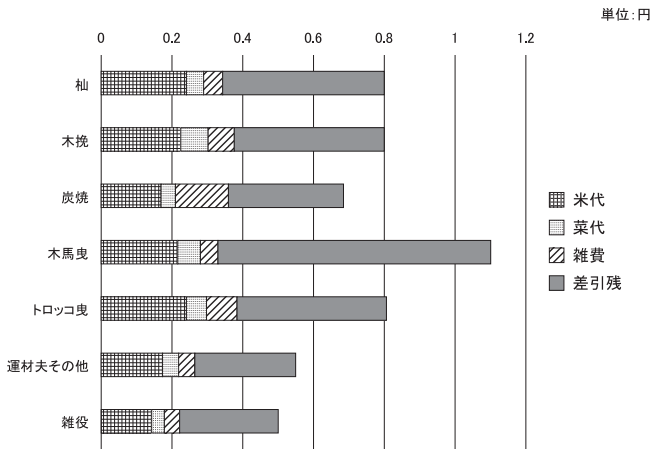


図8 林業従事者の職種別生活費 (1912年、一日あたり)

出典：『高知大林区署統計書』1912 (大正元) 年度版

先ほど紹介しました『高知大林区署統計書』にはいろいろなデータが載っています。これまで林業史からは注目されてこなかった暮らしに関する統計データが、語りを聞かせていただくことで、非常に意味のあるデータだということが分かってきました。統計に基づく暮らしの再現は、次の世代や、社会に対してしっかり共有できるような研究をしていきたいと考えています。

5. おわりに

魚梁瀬林業を考える上で大切なことは、藩政時代に土佐藩直営の「御留山」として蓄積された膨大な森林資源があり、森林鉄道をはじめとする伐倒・集材・運材の設備および技術の飛躍的發展によって、これだけ地理的自然的条件において厳しい地域にありながらも森林資源の開発、造成が実現されたということです。

また、一方で地域全体を見てみますと、国有林の経営というのは商品経済の浸透の時期と重なり、現金収入源となる雇用の場を住民に提供しただけでなく、中芸地域の山村経済に極めて大きな影響を及ぼしたと考えられます。

今後の調査を進める上で注意しなければいけない点としては、地域経済と国有林の関係について、「国有林側」と「地域側」の双方の視点からこの中芸地域の近代化を明らかにする必要がありますと考えています。特に統計や書物については、ほとんど「国有林側」によって書かれた資料しか残っていません。「地域側」の視点については、文字になっていない皆さんの記憶であったり、写真であったりというものをこれからしっかり蓄積していくことが必要で、ここが抜けるとただの国有林野史になってしまいます。今後は、「国有林側」と「地域側」の双方の視点で、この地域の近代化というものをもっともっと明らかにしていきたいと考えています。以上で報告を終わります。ご清聴ありがとうございます（拍手）。

(あかいけ しんご 特任講師)